



今年一年も皆様のお力添えをいただきながら、光受寺の法務に携わらせていただきましたことに感謝を申し上げます。

振り返れば「コロナ」をはじめとして、様々な苦難に出会ってまいりました。多くのご門徒さまとの別れもあり、肉親との別れもありました。家族の病気や自身のことも含めてまさに「四苦八苦」の人生であることを実感させられた一年でもありました。

しかしその度ごとにお釈迦様が説いてくださった『大無量寿経』に説かれた「如来の作願(さがん)をたづぬれば 苦悩の有情(うじょう)をすてずして 回向(えこう)を首(しゅ)としたまいて 大悲心をば成就(じょうじゅ)せり」というお言葉を思い出したことです。

阿弥陀様は法蔵という菩薩であられたとき、苦悩にうち沈むこの私たちの姿をすでに見抜かれて「必ず救う」と誓ってくださっていたのです。それから想像を絶するようなご苦勞の果てに、その誓いを成就されて、「南無阿弥陀仏」という名乗りをあげてくださったということです。

来年は、はたしてどんな年を生きることになるのか不安だらけの人生ですが、「南無阿弥陀仏」が寄り添っていてくださることを深く信じて、安心して生きて行きたいと思っています。

報恩講 十二月十二日(日) 午前九時〜 午前のみ

法話 S・K 師

門信徒総会 午前十一時三十分〜

マスクを着用して
のご参詣をお願い
いたします。



今年から来年へむけて (行事予定など)

○「除夜の鐘」は中止します。 ○修正会は1月1日(午前8時より行います。)

○1月の「おぼんを囲むべ」の会は中止。 学習会は行いません。

葬儀の在り方に思う。

ここ二十年程の間に自宅での葬儀を行ったお宅は数件ほどしか覚えがありません。最近ではほぼ百パーセントが葬儀場で執り行われています。その理由は様々であるのですが、多くの場合は近所への気遣いもなく、面倒なこともお金さえ出せば業者がスムーズに事を運んでくれることが主な理由のようです。

しかし、最近は何とかが家族葬、ないしは近親葬で少人数であることから、式場をあえて利用する必要があるのかと少し疑問に思ったりもします。今までに総勢十人以下の葬儀を何度か行いましたが、自宅で充分できるのではないかと思われる内容でした。

長年親しんでこられたご本尊の前での通夜、葬儀ができれば、より心にしみる葬儀になるのではないかと思います。お葬式は一生を締めくくる最大の儀礼です。亡き人を偲びつつ、如来のみ教えにであっていきける葬儀にしたいものです。

ちなみに葬儀屋にお訪ねしたところ自宅、お寺で執り行う場合でも返礼品、食事、お供えを除けば40万円ほどだそうです。高いのか安いのかそれはよく分かりませんが、今後、家族葬、近親葬が主流になってくることは明らかです。寺の方でも十分それに対応ができるよう準備を整えていきたいと思います。

東本願寺の報恩講にて

報恩講とは、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人の御命日の法要です。

毎年十一月になると東本願寺では一週間にわたって特別な法要が勤められます。そのうち一日だけ「子供報恩講」が開催されるというところで参加してきました。

例年はマスコミリポーターや出店で賑わっているのですが、コロナの関係で、イベントも縮小されていて少し寂しい気もしますが、それでも全国からたくさんの子どもたちが集い、お経を

読み、お坊さんの話を聞きました。お話では「報恩講」の言葉の意味を易しく説明してくださりました。

「報」とはありがたごとく受け取ること、「恩」とはプレゼントをあげること、「講」とは皆で集まること、仏さまはいつも皆を見ていて幸せに仲良く暮らしてほしいと願っていること。そのプレゼントをありがたごとく受け取って皆でお参りするのが報恩講なんだよ。という趣旨の内容でした。

十一月の光受寺の報恩講、各家庭での「おじりごしも」一年の感謝の思いをもって望みたいものです。



今月の掲示板

ぶつ 一じゆみょう

仏の光明は

むみょう やみ

無明の闇を

やぶ

破つてくださる

ちえ

智慧である

「無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり」(真

宗聖典・149) 私たちは勝った負けたの世界で生きています。勝ち負けの世界は「無明の闇」。その闇を破つてくださるのが光明。仏様の智慧なのです。

近頃行われた選挙でも勝った負けた、受験でも受験戦争といわれるくらい勝った負けたの激しい世界で生きています。口では戦争はいけなしいと言いながらも無意識に戦つことが大好きなのが実は人間なのです。こんな私たちの心底に光を当ててわが身を振り返らせよう。くださるのが阿弥陀様の智慧だといひたいです。

9回目

こころの散歩



親鸞聖人の長命を思う

親鸞聖人は九十歳の長命を全うされました。鎌倉期は日照り・大雨・台風・地震など天変地異が相次ぎ、それに伴う深刻な飢饉が襲い多くの死者が出る時代でした。当時の著名な僧の寿命は、法然上人七十八歳・最澄五十五歳・空海六十一歳・道元五十三歳です。

一つしてみると親鸞聖人の長命は飛び抜けたもので、驚くほかありません。これは強靱な健康に恵まれたほか、精神的な面で平生業成の境地に生きられたことが、結果として長寿につながったものと推察されます。浄土真宗の中興の祖と言われる蓮如上人も八十五歳の長寿でした。長い間衰微していた本願寺をよみがえらせ、最大規模の仏教集団に育て上げられた功績は計り知れないものがあります。この背後にも深い信仰、悟りの境地が広がっているものと思われれます。私ども、真宗門徒の一人として確かな信心を獲得し、長寿になげたいものです。

光受寺御遠忌法要



鏡御影

新「ナナ」

十二回連載

樹林

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ
南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

問いつける歩みとともに